

『平家物語』の読み

— 宗教的側面を取り入れることについて —

榎原 帝人

1 『平家物語』の読みの問題と問題設定

『平家物語』は近代教育の初めから現在に至るまで国語教科書の教材として長く使用されてきた。『平家物語』のこれまでの扱われ方や今後の学習展開について考える際に、ハルオ・シラネ他（『創造された古典—カノン形成・国民国家・日本文学』1999年、新曜社）が提起したカノン化の問題が挙げられる。本書は古典教材の読みが、その時代の価値意識のもとにその都度創られてきたということを論じている。本論も、『平家物語』の読みを考えるにあたって、まず、読みは相対的なものであるということ前提とする。つまり、『平家物語』教材の理解そのものが、時代によって常に変化していく可能性のあるものであることを意識しておきたい。また、教材の

理解が変われば、それに応じて指導法も変容することになる。ここでは、『平家物語』の教材理解と指導法に、どのような展望が考えられるのかを検討したい。

デイビット・バイアロック（1999）¹は、前掲書にて『平家物語』における近世から近代にかけての研究史を近代国家と国民の創成という枠組みでとらえている。以下、その中から本論で押さえておきたい点を要約した。以下要約

戦前の批評家たちは『平家物語』に抒情的、悲観的、仏教的要素を見出していた。しかし小林秀雄をはじめとして多くの批評家たちが仏教的無常教養を説くことに意義を立て、終戦直後に国民的叙事詩として武士の賞賛へと仕立てようと変わった。戦前には仏教的要素から研究がすすめられた。明治中期に芳賀矢一や藤岡作太郎と

いった学者たちによって仏教的解釈や抒情的解釈がなされていき、1920年には五十嵐力が『平家物語の新研究』、1931年には『軍記物語研究』にて感情を表す語彙を多用しながら叙事的スタイルを強調した。また高山樗牛が「平清盛論」にて清盛を個人主義と我執主義の最も完全な手本とした。また1910年までに個人主義とヒロイズムを読み取る高山樗牛の解釈は後に高木市之助、小林秀雄らによって受け継がれていくことになる。

第二次世界大戦中に至るまでの間、保田興重郎は『未曾冠者』にて美学的『平家物語』観を追求してきた。また田口卯吉や生田長江が叙事詩的な見方から研究を続け、生田は1906年に『国民的叙事詩としての平家物語』を発表し、武士と僧侶を媒介とし『平家物語』が階級にとられない国民的性格を表しているとした。姉崎正治は『時代の告白としての叙事詩』と題する論文で感情的内容を扱う詩歌と比較している。1910年には『叙事詩としての『平家物語』』が岩野泡鳴によって書かれた。1917年には津田左右吉によって『文学に現はれたる我が国民思想の研究』を書いたように『平家物語』を叙事詩としてまた感情的な抒情詩としての両面から提唱した。

戦後においては石母田正をはじめとして谷宏や永積安明らが歴史学の方法論に精通した研究者によって再評価

される流れになった。石母田は『中世的世界の形成』にて『平家物語』が琵琶法師たちによって貴族文化と農民文化をつなぎ社会階層の壁を越えた作品であるとしている。

要約以上

このように文学研究においてさまざまに展開された『平家物語』の読みは、教育現場での読みに大きな影響を与えてきたと考えられ、現在においてもそのいくつかの考え方は息づいていて考えられる。本研究では、『平家物語』が現行の教科書でどのように扱われているのかを調べたうえで、さらに深い読みを目指した新しい読みの可能性がないか考えていきたい。

2 現行の教科書における『平家物語』

2 1 中学校教科書の学習の手引きによる調査

この項では、現行中学校教科書の『平家物語』教材を使った単元の学習の手引きから、そこにどのような読みを実現しようとしているかを抽出する。次に示すものは東京書籍『新しい国語2』、光村図書『国語2』、三省堂『現代の国語2』、教育出版『伝え合う言葉 中学国語2』の学習の手引きである。

東京書籍

1、表現の特徴に注意して、「那須与一」を繰り返し朗読してみよう。

2、扇を射ることを命じられた「与一」は、どのような状況に置かれ、どんな気持ちになっていただろうか。文章中の言葉を手がかりに話し合ってみよう。

3、武士の価値観や生き方とは、どのようなものだったのだろうか。「那須与一」「弓流」から読み取り、考えたことをまとめよう。

振り返り

武士の価値観や生き方、表現の特徴など、「平家物語」を読んで学んだことを自分の言葉でまとめよう。

この学習の手引きを活動の特徴となる要素を取り出すと以下ようになる。

1の音読古文の、特に平曲のリズムを体感させることを狙っている。

2の登場人物の心情理解は、物語の読解としては定番の活動であるが、登場人物の生き生きとした姿として読むことにつながる読み方だと言える。

3の武士の価値観や生き方について人物像という点に焦点を置いている。

振り返りについては3の活動を通して考えたことを改め

てまとめることが狙いだと考えられる。

その他の出版社に関しては以下のような手引きとして記載されている。

光村図書

朗読して古典のリズムを楽しもう。

登場人物の行動から、心情を考えよう。

読み取ったことを基に自分の考えを述べよう。

三省堂

人物の様子や特徴を思い描きながら、古文を音読しよう。

熊谷次郎直実の行動や心情について、まとめ、話し合おう。

「冒頭（祇園精舎）」と「敦盛最期」とに共通したものの見方・考え方について、自分の考えを文章にまとめよう。

教育出版

歴史的仮名遣いに注意して、音読しよう。

登場人物の言動や心情について話し合おう。

登場人物や語り手などの役割を決め、場面に合わせて朗読しよう。

光村図書も東京書籍と同様に平曲のリズムを体験させる指導や心情理解など内容理解を目指した活動を行っている。三省堂は人物像を意識した音読と、心情読解、ものの見方や考え方を中心に取り組むよう促している。教育出版は歴史的仮名遣いに注意して音読し、心情読解、武士の生き方や価値観を読み取るよう記載されていた。朗読活動を取り入れているのは教育出版だけであった。音読の目的が出版社ごとに異なるのと、どの出版社も武士の生き方や考え方に焦点を置いて指導するよう促していることが分かった。このことから、中学校の教科書の学習の手引きには記載されている内容の大きな違いはなかったことが確認できた。

2 2 高等学校教科書の学習の手引きによる調査

この項では、高等学校教科書の『平家物語』単元の学習の手引きから、そこにとどのような読みを実現しようとしているかを抽出する。

次に示す例は、東京書籍『新編言語文化』における『平家物語』『木曾の最期』における学習の手引きから引用したものになる。

1、義仲と兼平が最期を遂げるまでの戦いの推移をたどりながら、この文章を音読しよう。

2、義仲は巴に「おのれは疾う疾う、女なれば、いづちへも行け。」と言っているが、その時の二人の心情を考えよう。

3、兼平が、最初、「御身もいまだ疲れさせ給はず。」と言いながら、後に「御身は疲れさせ給ひて候ふ。」といったのはなぜか。

4、「さばかり日本国に聞こえさせ給ひつる木曾殿をば」と、「この日ごろ日本国に聞こえさせ給ひつる木曾殿をば」では類似した表現が繰り返されているが、それによりどのような効果が表れているか。

5、義仲と兼平の心情に触れながら、それぞれの死の描かれ方についてまとめよう。

以上を踏まえて学習の手引きの特徴となる要素を取り出すと、以下のようになる。

1音読は、古文の、ここでは特に平曲のリズムを体感させることを狙っている。

2登場人物の心情理解は、物語の読解としては定番の活動であるが、登場人物の生き生きとした姿として読むことにつながる読み方だと言える。

3登場人物の発言の意図は、物語世界の場面状況を理解することが前提となる問いである。叙事詩として読むことにつながる読み方だと言える。

4表現の効果は、内容読解だけでなく筆者が残したこの

場面で強調しなかった意図が読み取れる。

5 登場人物の心情と死の描かれ方は、主従愛と武士の名誉という美意識につながる読み方だと言える。

またその他の出版社では以下のような手引きである。なおすべて『平家物語』の「木曾の最期」における学習の手引きであった。

桐原書店 探求言語文化

木曾義仲と今井四郎について、二人の心の結びつきが特に表現されている会話を、本文中から指摘してみよう。

今井四郎の言葉が「御身もいまだ疲れさせたまはず。」から後に「御身は疲れさせたまひてさうらふ。」へと変わったのはなぜか、考えてみよう。木曾義仲と巴の結びつきと、義仲と今井四郎の結びつきを比較・対照しながら、考えたことを話し合ってみよう。

第一学習社 高等学校言語文化

義仲が巴にかけた言葉について、言葉にしていない思いも想像して、せりふの形で書いてみよう。

義仲と兼平の言動から、武士の立場に基づく部分と、人間的な面が表れている部分とをそれぞれ指摘し、そ

こに表れた心情を読み解こう。

語り物の特色が表れていると思う描写や表現を指摘し、なぜそう思ったのか、理由を説明してみよう。

筑摩書房 言語文化

義仲と巴、義仲と心の通い合いはどのように描かれているのか、それぞれ叙述をふまえて具体的にまとめなさい。

義仲の死がどのようなものとして描かれているか、兼平の死と比べて書きなさい。

明治書院 精選言語文化

音便や文の調子に注意して、音読してみよう。各部分から敬語を指摘し、敬語の種類と品詞について調べてみよう。

次のそれぞれの場面での、登場人物の心情はどのようなものか、考えてみよう。

義仲と巴が別れるときの、義仲と巴のそれぞれの心情
主従二騎になったときの、義仲と兼平のそれぞれの心情。

義仲と兼平の、それぞれの最期を遂げたときの心情。

本文の音便やリズムを感じながら音読してみよう。

本文の登場人物と場面を整理してみよう。

本文の中で、数詞が効果的に扱われている部分を指摘し、それが内容展開のうえで、どのような効果を与えているか、説明してみよう。

本文の中から、音便を含む文節を抜き出し、音便部分に傍線を付けてみよう。

「今井四郎、木曾殿、主従二騎になつてのたまひけるは、」以下の部分に描かれている、義仲・兼平主従の情愛の交流について、五百字程度の感想文を書いてみよう。

数研出版 新編言語文化

文章のリズムを感じ取りながら音読してみよう。

本文に名前が出てくる人物を整理し、源義仲方と源頼朝方に分けてみよう。

義仲と兼平はどのような人物か。本文から根拠をあげて話し合ってみよう。

数研出版 言語文化

「木曾殿はただ一騎うつひに木曾殿の首をば取つてんげり」から義仲が討たれてしまった要因をあげてみよう。

う。

武士の死はどのような死が理想とされていたか。兼平の発言をもとに、「義仲の死」と「兼平の死」を比較して考えてみよう。

「義仲・巴の愛情」「義仲・兼平の愛情」は、どのように描かれているか。それぞれに対比し、そこから読み取れることを話し合ってみよう。

大修館書店 言語文化

「木曾三百余騎」以下「主従五騎にぞなりにける。」までの戦闘の様子を、数字の使われ方に注意して説明してみよう。

巴に対する義仲の言葉は、義仲のどのような気持ちから出たものか、考えてみよう。

主従二騎になつてからの義仲と今井四郎の心情の移り変わりを、二人の会話に着目して整理してみよう。

本文にふさわしい朗読のしかたを工夫してみよう。

三省堂 精選言語文化

「巴との別れ」を読み、義仲と巴の言動から、それぞれの心情をまとめてみよう。

「御身もいまだ疲れさせ給はず。」「御身は疲れさせ給ひて候ふ。」と反対のことを言っていた兼平の、そ

の時々、の気持ちを説明してみよう。
 主従二騎になってから、義仲の心情はどのように変化していくか。兼平に対する言動に即して整理してみよう。

東京書籍と同様に音読を取り入れた出版社はいくつか見られた。また義仲と巴、義仲と兼平の心情を問いかける取り組みは他の出版社でも確認できた。また東京書籍にはなかった今井四郎と義仲との心情を考える活動が確認できた。全体の振り返りとして主従愛や武士の名譽に迫る問いかけが多く、また東京書籍と筑摩書房に見られるように高等学校国語では心情読解や表現の効果の表れについて活動を行い、「死の描かれ方」について『平家物語』の物語の全体像をとらえるといった具体的な活動も確認できた。このように高等学校の教科書の学習の手引きは、登場人物の関係性やお互いの心情を問う活動が多く、出版社によっては文章の表現に関するものを取り上げていることから、基本的にとどの出版社も狙いが同じであることが分かった。中学校の読みと異なる点として、中学校はものの方・考え方及び武士の生き方や価値観を問いかけているのに対して高等学校は特に登場人物の生き様に焦点を当てて心情理解や登場人物同士の結びつきについて考えるよう問いかけているということが

考えられる。中学校や高等学校では、デイビット・バイアロックの述べたような仏教的要素や叙事詩、抒情詩の『平家物語』の見方が中心とされなくなってきたことが分かった。

3 『平家物語』における読みの展望

3 1 先行研究における実践の提案例

『平家物語』の先行研究及び実践例について、いくつか注目しておきたいものがある。

菊野雅之(2022)²は、『平家物語』を取り上げて、文学研究の成果を踏まえ、これまで教室で一般的に行われてきた読みを更新する提案をしている。菊野は、覚一本と延慶本、源平盛衰記の三つの諸本を比較しながら中学校教育における「敦盛最期」の検討を行っている。熊谷直実が敦盛を自分の息子である小次郎と重ね合わせ助げたい思いに駆られ葛藤する場面では、源平盛衰記にて敦盛を殺害した動機が「一度は捕らえた敵を逃がし、その敵は味方の手に落ちた」と人の噂となることが、屈辱であると判断したからであると発見している。また、延慶本では、敦盛を逃がした頼末を頼朝にまで報告されることを危惧しており、人間くさい直実の葛藤は描かれ

展開している。これらの実践に共通するのは、文学研究の方法を取り入れて、どのような出来事を取り上げて何を主として語っているのかを問題にしていることであると考えられる。

3 2 『平家物語』「扇の的」における宗教的側面を取り入れた扱いについて

『平家物語』には浄土思想や神仏習合の考えが大きく表れている。この項では『平家物語』における宗教的側面について考える。そのうえで実際に原文にあたって授業実践の手がかりを立案した。現行の学習の手引きでは、デイビット・バイアロックの述べたような抒情的な考え、叙事的な考え、そして仏教的考え方が重視されていない傾向にあることが分かった。ここでは一つの提案として「扇の的」における宗教的側面について新たな学習指導展開について示したい。次に示すのは「扇の的」の場面の一節である⁵⁾。

与一目を塞いで南無八幡大菩薩、我国の神明、日光権現宇都宮、那須湯泉大明神、願はくはあの扇の真中射させて賜はせ給へ、これを射損ずる物ならば弓きり折り自害して人に二たび面をむかふべからず

今一度本国へむかへんと思し召さば、この矢外させ給ふなと心の内に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹きよわり、扇も射よげにぞなつたりける。

この場面は、成功すると一族の将来を担保するという平家の衰退をかけた戦いである。ここでの与一は菩薩に身を捧げる覚悟の現れた様子である。与一は目を塞ぐ。その直後に出てくる表現は南無八幡大菩薩である。南無は仏や三宝などに帰依することである。八幡大菩薩。とは武運の神として語られる。扇の的を射ることは戦という真剣勝負の場であることが分かる。そして、自国の神である日光の権現⁷⁾、宇都宮大明神⁸⁾、那須の湯泉大明神⁹⁾にまで祈念している。この部分は、彼の心に去来するのは出身地である神であり、故郷に心の根を張ったまま遠路はるばる戦にきた者の心の様子いわず地域性が見て取れる。

次に祈念の内容になるが、射損ずるならば弓を壊し、自害して人に顔を合わせることを辞め、自ら死を決意する。再び故郷の地を踏むことはないかと与一は考えているのである。また、武士であることが自分の存在と同じであるほど重く考えている。的を外すということは武士として恥ずべきことであると同時に、与一にとつて自己の存在が否定されたことになる。だからこのようにして神に念願成就に己の存在を懸けて強く祈念しているのであ

る。こうした存在意義の有り様を押さえておかなければ、与一の一射絶命の心情をとらえることは難しいだろう。

「今一度本国へむかへんと思し召さば」と「思し召さば」と仮定条件の表現がされているように神に対して自ら条件を示している。これは神とのやり取りであり、神に対し、いわばあなたの一部である「子」を失っても良いかと迫っているのである。「願はくはあの扇の真中射させて賜ばせ給へ」と「この矢外させ給ふな」と成功と失敗の両方に言及しているところに、成功させてほしいことと、失敗しないでほしいという両方の気持ちが入り交じっている。このことから与一の心配の複雑な心情が読み取れる。「心のうちに祈念して、目を見ひらきたれば、風もすこし吹きよわり、扇も射よげになつたりける」とあるのは、与一の成功には神の加護があつたことをほめかす語りである。このように描くことで、与一は神に認められた存在と意味づけられる。

以上がテキストの分析となるが、この一節の言語活動の取り組みとして「何か叶えたいことや願いがあつたとき神に対して祈りますか。またどのように祈りますか。その時の気持ちや状況を文章にまとめてみよう。」と問いを立てたうえで、「与一との祈念と異なるところはどこでしょうか。」と続けて聞きたい。与一の信仰した神々

のことを調べて地域性に注目した上で、与一の心の有り様を掘り下げて読む展開も考えられる。源氏方の人物造形には、武士のものの見方や考え方といった点を取り上げることも多いが、地方色が描かれているというところに注目することで、中央と地方の力が相克する「叙事詩」的側面にも触れることができよう。宗教的側面を取り上げることにについては、生徒自身も、与一のように何かを心の拠り所にしたいと思うこともあるだろう。与一の祈念は武士という立場及び命と引き換えにしていたことは先に述べたことであるが、私たちが日常生活で行う一般的な神頼みではないことを読み取ることは、同時に与一に似て非なる生徒自身の心の有り様を相対化することになる。

おわりに

近年の先行研究では異本による授業展開の導入や「死の描かれ方」について言及されてきた。そうした先行研究を踏まえたうえで『平家物語』の深い読みを目指すにあたって、デイビット・バイアロックの述べた研究史にもあつた宗教的側面に関する『平家物語』に対する見方を、国語教育に取り入れることができるだろう。この主旨は、決して宗教的側面から『平家物語』を読むべきだ

ということではない。近年の国語教育は避けるような傾向にあると思われる宗教的側面は、『平家物語』に限らず、探求的な活動として読むうえで避けて通れないのではないかと考えている。

注

- 1 『国民的叙事詩の発見—近代の古典としての『平家物語』』（前掲『創造された古典』掲載。岩谷幹子訳）
- 2 『古典教育をオーバーホールする…国語教育史研究と教材研究の視点から』
- 3 鈴木恵 古典教材の授業づくり…『平家物語』扇的をめぐる 発行されたのは2017年である。
- 4 武久康高 活用力を育成する古典授業の開発・『平家物語』「扇的」（中学校2年生）の場合・
- 5 日本古典文学全集『平家物語』11巻「那須与一」より引用
- 6 八幡神に奉った称号。仏教の立場から八幡宮の本地を菩薩として呼ぶ称で、神仏混淆の結果起こったもの。日本国語大辞典より
- 7 栃木県日光市山内にある天台宗の寺 日本国語大辞典より
- 8 栃木県宇都宮市にある神社。単に「荒山神社」ともいう。デジタル大辞泉プラスより

9 栃木県那須郡那須町、那須岳南東斜面にある温泉。那須温泉郷の中心。付近に那須与一ゆかりの温泉（ゆぜん）神社がある。デジタル大辞泉より

参考文献

- ハルオシラネ 鈴木登美 創造された古典—カノン形成・国民国家・日本文学 1999年、新曜社
- 菊野雅之『古典教育をオーバーホールする 国語教育史研究と教材研究の視点から』
文学通信 2022 - 09
- 鈴木恵 古典教材の授業づくり…『平家物語』扇的をめぐる
新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 9（2）、389-401, 2017-03
- 武久康高 活用力を育成する古典授業の開発・『平家物語』「扇的」（中学校2年生）の場合・
高知大学教育学部研究報告 75, 43-50, 2015-03
- ジャパンナレッジ 最終閲覧日 令和5年11月21日
- 日本古典文学全集『平家物語』11巻 市古貞次 小学館
- まきはら・ていと 日本文学研究科修士課程一年 —

『尾道市立大学日本文学論叢』第15号目次（平成30年12月）

創作

第51回中国短編文学賞大賞受賞作

月の人

則直 真衣

第49回中国短編文学賞優秀賞受賞作

CCに並ばない

小池 夏美

Carpe diem

百武 彩花

プリーズ・リメンバー

星野 椰子

2018年度おのみち文学三昧

「文学で勝手に町おこし」企画について

光原 百合

おのみち文学三昧十周年記念企画

「尾道を読む」／「尾道を書く」／公募作品と総評

公募作品

井原 真美・太田 かな

横尾 嘉之・見谷 香乃

大原里梨歌・本岡 佳奈

則直 真衣

研究論文

「タバカル」の語史

——意味と構文の変化から——

鈴木 真穂

『温故抄』の亀山天皇の和歌

藤川 功和

『撰政家月十首歌合』を読む

——「十三夜晴」題——

尼崎 ころ

財津 奈々

芝崎 祐介

由良木 陽向

藤川 功和

上方絵本『桃太郎』考

——狂言「節分」の取り入れ——

佐野佳那実

吉屋信子「鬼火」論

——墓前の献花と「紫苑の家」——

財津 奈々

平成三十年度卒業論文・修士論文題目

平成三十年度三年生研究発表会発表題目

彙報

総評

澤西 祐典

福永 信

円城 塔